

ジョン・キーツの詩における革新の詩学

後藤, 美映

<http://hdl.handle.net/2324/4475222>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 後藤 美映

論 文 名 : ジョン・キーツの詩における革新の詩学

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀初頭のイギリス・ロマン主義時代の詩人、ジョン・キーツ (John Keats) の詩が、18世紀末から19世紀初頭の時代の歴史的・政治的な文脈のもとで、いかに革新的な特質を包含するものであったかについて明らかにするものである。特に、キーツの詩的革新性は、当時正統と目された美学的規範としての「趣味」を逸脱する、過剰ともいえる感覚的、身体的な詩的イメージにあることを解き明かし、19世紀中葉以降キーツに与えられた芸術のための芸術を謳う「美」の詩人像を塗り替える、近代的革新性を旨とする新たな詩人像を呈示することを本論文の主眼とする。

本論文は4部10章と序論と結語よりなる。第1部は、キーツの叙事詩『ハイペリオン』を中心に、当時叙事詩に要請された趣味概念を考察し、時代の美学的主潮を逸脱する『ハイペリオン』の視覚的、身体的イメージに、近代的革新的な創造性が存在することを明らかにした。第1章では、国家の威信と安寧を証明すべき愛国主義を言祝ぐ詩としてみなされてきた叙事詩の伝統に対して、キーツの叙事詩は、ジョン・ミルトンの『失樂園』の影響のもと、タイタン族からオリンポスの神々への王位交代劇を、国家創世の普遍的真理としてではなく、人間の身体的、感覚的経験を通して得られる美学的哲理として表現したことを論じた。第2章では、『ハイペリオン』の中心主題となるべきヘレニズムの世界を象徴する端正な美のイメージが、巨大な大きさを誇るエジプトの古代遺跡の視覚的イメージに取って代わられることに焦点をあて、愛国心、信仰といった叙事詩の超越的命題ではなく、人間性についての具象的、感覚的な表象に『ハイペリオン』の革新性が存在したことを論じた。第3章では、西洋叙事詩の伝統を担うダンテの『神曲』からの影響を考察しながら、『ハイペリオン』が、人間に黙約的に与えられた身体を共通の基盤とし、そこから得る感覚的経験を極め、人間共通の苦痛や歓びという「共通の感情」を歌うことを希求した詩であることを論じた。

第2部は、キーツの詩的革新性の基盤が、イタリアというヨーロッパの南の地／知を軸

に、リイ・ハント、ジョージ・ゴードン・バイロン、パーシー・ビッシュ・シェリーらと共に「コックニー詩派」と名付けられた芸術家集団の同盟意識にあることに焦点をあてた。第4章では、ダンテの『神曲』の地獄篇に影響を受けたキーツとハントの恋愛詩を具体的に考察し、コックニー詩派の共同体意識が、「コスモポリタニズム／世界市民主義」(cosmopolitanism)を奉じる、汎ヨーロッパ的な外向性や身体性を謳う南欧の知に位置づけられ得ることを明らかにした。第5章ではさらに、ハント、バイロン、シェリーらがイタリアのピサにおいて創刊した文芸雑誌『自由主義者』にみるコスモポリタニズムを通して、イタリアという南の地が担う文化的政治的意義を考察することによって、彼らの詩的改革の試みを明らかにした。

第3部は、19世紀初期の時代における近代国家の存立と、それとは対照をなす、ブルジョワジーによる「対抗的」公共圏の誕生という政治的、文化的空間において、「ナイティンゲールへのオード」と「ギリシャの甕のオード」を解釈するという読みの可能性を提示し、そこに表現されるオードの革新性について論じた。第6章では、「ナイティンゲールへのオード」において表現される衰弱する、消化不良の身体空間は、美学的な言説の形を取りながら、当時の摂政政体において蔓延した、いわゆる「肥満」する経済、政治空間へのアンチテーゼとして機能し、その結果、イギリスのナショナリズムと帝国主義への批判として作用する可能性について論じた。また第7章では、「ギリシャの甕のオード」が、19世紀初頭の文化的政治的言説の磁場であった対抗的公共圏を前提として誕生した詩作であることを論じた。そして、オードが、そうした公共圏を形成したブルジョワジーの商業主義的な価値観を共有することによって、理想美としての古典的美の特権化を打破する、美の表象の多様性を呈示する作品であることを論じた。

第4部は、キーツの詩における身体的レトリックに焦点をあて、キーツの詩の革新性の中心に据えられる「身体」の意義を明らかにした。第8章では、1818年にキーツが敢行した湖水地方からスコットランド北部の高地地方への徒歩旅行において創作された詩やその間に書かれた書簡を考察し、そこで描かれるイギリスの自然が、伝統的美学や牧歌的なイギリスらしさへと収斂するのではなく、身体性を基軸にした現実の諸相を反映するものとして表現されることを論じた。第9章では、そうしたキーツの創造性を特徴づける身体的イメージとは、高尚な「趣味」を問うべき詩的創作において、tasteの両義的意味を成す、「味覚」とその消化という感覚に重きを置くものであり、身体の詩学ともいえるべき革新性を内包していたことを明らかにした。そして、第10章では、こうした身体の詩学の淵源に、当時の最先端の学問領域であった医科学の影響が存在することを明らかにした。実際に医科学を学んだキーツの詩において、医科学が援用され、詩において表現され

る医科学的人間像は、当時の人間性のヴィジョンを刷新する、近代的革新的な思想に裏打ちされたものであったことを明らかにした。

このようにキーツの詩の革新性は、結語として、最終的にイギリス・ロマン主義の詩が内包する革新性の中の一つの水脈を形成するものであったことを論じた。ロマン主義文学において詩は、活字媒体を通して、一般の読者へと向けられた啓蒙のための知識であり、その人間性についての知の体系は、人間の共同体を統一し救済するための民主的な装置として機能することが意図されていたといえる。したがって、ロマン主義の詩の革新性の一端を担うキーツの詩とは、詩の言葉によって表現された知識を、大衆へと解放することによって、人間個人とその共同体である社会のための改革を企図した創造性にあると結論づけた。